

高校生の抑うつに対する 自己評定と教師評定の特徴

— 学校現場の支援に向けた心理尺度の活用と課題 —

杉山 智風^{1, 2}・伊奈 優花³・岸野 莉奈⁴
松崎 文香⁴・小関 俊祐⁵・石川 利江³

¹桜美林大学大学院国際学研究所・²日本学術振興会特別研究員 (DC2)・

³桜美林大学大学院心理学研究科

⁴桜美林大学大学院心理学実践研究学位プログラム

⁵桜美林大学リベラルアーツ学群

Characteristics of Subjective Ratings Scale and Teacher's Ratings Scale for
Depressive Symptoms among High School Students
— A Review of Psychological Scales for Psychological Support in School —

Chikaze SUGIYAMA^{1, 2}, Yuka INA³, Rina KISHINO⁴,
Ayaka MATSUSAKI⁴, Shunsuke KOSEKI⁵, Rie ISHIKAWA³

¹Graduate School of International Studies, J. F. Oberlin University

²JSPS Research Fellowship for Young Scientists (DC2)

³Graduate School of Psychology, J. F. Oberlin University

⁴Master of Arts in Psychology, J. F. Oberlin University

⁵College of Arts and Sciences, J. F. Oberlin University

キーワード：抑うつ, 高校生, 自己評定, 教師評定, 心理尺度

抄録：

展望Ⅰでは、高校生の抑うつを測定する自己評価式尺度について概観し、その目的や内容、特徴について整理を行った。展望Ⅱでは、児童生徒の心理社会的側面を測定する、教師が評定者となる他者評価式尺度を展望し、抑うつとの関連や測定内容、特徴について整理を行った。最後に、展望Ⅰおよび展望Ⅱを踏まえ、高校生の抑うつに対する自己評価式尺度と教師による他者評価式尺度のそれぞれの利点を生かした支援への活用や、今後の課

題について検討を行った。高校生の状態像に対する多面的な理解のためには、自己評価式尺度と他者評価式尺度の測定内容の違いや、長所と短所を踏まえたうえで、心理尺度を活用する重要性が示唆された。

第1章 問題と目的

高校生の抑うつに対する早期発見および早期対応のための具体的支援の確立は、喫緊の課題といえる。文部科学省(2021)によると、高校生の自殺者数は増加傾向にあることが明らかとなっており、自死の理由として、進路に関する悩み、学業不振に次いで、うつ病が多く挙げられている。日本の高校生のうつ病の推定有病率は6.0～6.5%と高いことが報告されており(山口ほか, 2009)、思春期や青年期における抑うつが、成人後のうつ病発症や長期的な心理社会適応の阻害と関連があることが指摘されている(Clayborne, Varin, & Colman, 2019; Johnson, Dupuis, Piche, Clayborne, & Colman, 2018)。

こうした現状を鑑み、うつ病の中核症状である抑うつをアウトカムとした、学校現場におけるストレスマネジメントの実践が複数行われている(たとえば、小関・大谷・小関, 2014; 大島ほか, 2019; 堤, 2013)。これらの実践においては、質問紙法による心理尺度を用いて、生徒の抑うつを測定することによって、生徒の状態像のアセスメントや介入効果の検証を行っている。質問紙法による心理尺度は、複数人に同時に情報収集ができ、比較的容易に実施できるなどといった点で、学校現場で活用するうえで有用と考えられる。質問紙法の利点として、土田ほか(2011)は、スクールカウンセラーや教員などの支援者間での連携に際して、情報共有が円滑になることを挙げている。また、三浦(2006)は、生徒を理解する際に客観性のある補足資料となること、普段は見落としていた生徒の問題や兆候に気づきを促せること、家庭などの学校生活では見えにくい生徒が置かれている状況を把握するうえで役に立つこと、などといった点を挙げている。

このような心理尺度は、学校現場において、生徒による自己評価式尺度だけでなく、教師による他者評価式尺度も用いられている。従来、他者評価式尺度は、対象者が幼児や児童の場合に、言語理解や内省力の低さを考慮し、教師や親による他者評価式尺度が開発され、活用されてきた(たとえば、金山ほか, 2006; 中澤・中道, 2007; 立元・戸ヶ崎, 2007)。その一方で、高校生においては、自己評定式尺度を成人と同程度に適用可能と考えられるが、社会的望ましさや、質問内容への抵抗感などにより、適切な情報収集に影響を及ぼす可能性がある。また、高校生は生活の中の多くの時間を学校で過ごすため、他者評価式尺度を用いる評定者のなかでも、特に教師は日ごろの対象者の様子を観察しやすく、効率的に精度の高い情報収集を行うことができると考えられる。特に、予防的観点に基づけば、教師が生徒の心理状態について心理尺度を用いて評価することは、生徒の心理的不適応や問題行動に対して数量的な視点をもつことにつながり、情報共有や支援の効果検討を行ううえで有用であるという利点も挙げられる。さらに、心理尺度を用いて評価を行う

機会を定期的に設けることができれば、日ごろの生徒の様子を客観的に振り返る機会となり、早期発見や早期対応に期待できるという利点も考えられる。その一方、本邦においては、児童生徒の心理的不適応や問題行動を評価できる、十分な信頼性と妥当性が確認された教師評定式の心理尺度は少ないことが指摘されている(石川, 2011)。そのため、高校生の抑うつに対する心理的支援への活用に必要な観点や、今後の課題を明らかにするためには、小学生から高校生までの児童生徒を対象とした、教師による他者評価式尺度を網羅的に収集し、現状や今後の課題を整理する必要が考えられる。

以上のことから、高校生の抑うつを測定するために、自己評価式尺度と教師による他者評価式尺度を用いることは、生徒の状態像に関する情報を効率的に収集し、支援につなげるうえで有用である。学校現場で、高校生に適用可能な心理尺度の現状と今後の課題を明らかにすることは、高校生の心理的支援の発展において重要と考えられる。まず展望Ⅰでは、高校生を対象とした、抑うつに関する調査研究および介入実践研究で用いられてきた、自己評価式尺度について概観し、その目的や内容、特徴について整理を行うこととした。次に、展望Ⅱでは、抑うつとの関連が指摘されている心理的不適応や問題行動の早期発見や早期対応に寄与することを目指して、小学生から高校生までの児童生徒の心理社会的側面を測定する、教師が評定者となる他者評価式尺度を展望し、抑うつとの関連や測定内容、特徴について整理を行うこととした。最後に、展望Ⅰおよび展望Ⅱを踏まえ、高校生の抑うつに対する自己評価式尺度と教師による他者評価式尺度のそれぞれの利点を生かした支援への活用や、今後の課題について検討することとした。

第2章 展望Ⅰ

1. 目的

展望Ⅰでは、高校生を対象とした調査研究および介入実践研究にて、高校生の抑うつを測定することを目的として引用されていた心理尺度を収集し、その内容や特徴について整理を行ったうえで、現状と今後の課題について検討を行うこととした。

2. 方法

2000年から2021年の間に、心理・教育領域における研究誌である以下の7誌にて発表された、日本の高校生を対象とした調査研究もしくは介入実践研究において、抑うつを測定するための自己評価式尺度として引用された心理尺度を収集した。収集対象とした学術誌は、『心理学研究』『教育心理学研究』『カウンセリング研究』『認知行動療法研究(行動療法研究)』『ストレスマネジメント研究』『健康心理学研究』『パーソナリティ研究』であった。

なお、本研究における尺度とは、因子分析により因子構造が明らかとなっている、という条件を満たすものとした。

3. 結果と考察

本研究の手続きにより収集された、高校生を対象とした調査研究もしくは介入実践研究において抑うつを測定するために用いられていた心理尺度は、SDS (福田・小林, 1973), HAD (Zigmond & Snaith, 1993), CES-D (島・鹿野・北村・浅井, 1985), CDI (真志田ほか, 2009; 村田・堤・皿田・中庭・小林, 1989), 中学生用ストレス反応尺度 (三浦・福田・坂野, 1995), SDQ (Goodman, 2005), SRS-18 (鈴木ほか, 1997), YSR (倉本ほか, 1999) の8種類であった (Table 1)。このことから、本邦で高校生の抑うつを測定するために従来用いられている、代表的な自己評価式尺度は、上記の8本であることが明らかとなった。そのうち、SDQ (Goodman, 2005) と SRS-18 (鈴木ほか, 1997) においては、高校生を対象に信頼性と妥当性の検討を行っている一方で、そのほかの尺度においては、小中学生や成人向けに開発されたものを高校生に適用しているといった現状が明らかとなった。

それぞれの心理尺度で測定される内容として、“抑うつ気分 (落ち込みや憂鬱さなど)” を測定することを目的とした下位尺度は、すべての尺度に含まれていた。抑うつ気分は、抑うつ症状の中核症状であることから、生徒の抑うつの程度を把握するうえで不可欠な情報と考えられる。その他には、本人が自覚している身体症状や、学業や対人関係などの社会生活への影響を測定する下位尺度が含まれていた。

さらに、中学生用ストレス反応測定尺度 (三浦ほか, 1995) と SRS-18 (鈴木ほか, 1997) は、ストレス反応全般を測定するものではあるが、因子名に「抑うつ・不安」が含まれており、下位尺度によって抑うつを測定していた。また、SDQ (Goodman, 2005) は心理社会的適応を尺度全体としては測定するが、下位尺度に「情緒の問題」が測定され、抑うつとの関連が示されている (中島・伊藤・谷, 2012)。

また、最も多く用いられていた尺度は CES-D (島ほか, 1985) であった。20項目という比較的实施しやすい項目数であることや、コミュニティ集団の中でのハイリスク群を同定することを目的としているといった特徴から (杉山, 2007)、学校現場の限られた時間のなかでも実施しやすく、抑うつのリスクが高い生徒をアセスメントするうえで有用性が高いと考えられる。

その一方で、それぞれの尺度の特徴を踏まえて、集団の特徴に応じて使い分けていく必要性も考えられる。たとえば、CES-D はコミュニティ集団の中でうつ病のハイリスク群を同定することを目的として開発されたため、医療および臨床現場での使用を想定して開発されていないが、SDS は健常者の軽度の抑うつ症状の評定にも有用であることが指摘されている (杉山, 2007)。こうしたことを踏まえると、学校現場での活用においては、CES-D は学級集団を対象に一次予防を目的とした取り組みにおいて有用であり、SDS はすでに抑うつの訴えや既往歴のある生徒に対するアセスメントに有用であると考えられる。このように、それぞれの尺度の特徴を踏まえて、対象者や実施の目的に応じて使い分

けていく必要性が示唆された。

以上のことから、高校生の抑うつを測定する自己評価式尺度については、成人向けや小中学生向けの尺度を適用している現状があること、すべての尺度において“抑うつ気分”について測定する下位尺度が含まれており、情緒や感情面に関する情報収集が主となることが示唆された。

Table1 展望 I によって収集された、高校生の抑うつを測定する自己評価式尺度

著者名	発表年	尺度名	適用年齢	下位尺度	項目数	カットオフ値	引用論文
福田・小林	1973	SDS (Self-rating Depression Scale)の日本語版	成人	①主感情、②生理的随伴症状、③心理的随伴症状	20	0~49点が「正常」 50~59点が「軽度のうつ状態」 60~69点が「中等度~高度のうつ状態」 70点以上が「極度のうつ状態」	大久保(2005)；外川・田中・大澤 (2009)
Zigmond & Snaith	1983	HAD (Hospital Anxiety and Depression Scale) の日本語版	成人	①不安、②抑うつ	14	0~7点が「不安、抑うつなし」 8~10点が「疑診」 11点以上が「確診」	大谷・粕谷(2014)
島・鹿野・北村・浅井	1985	CES-D(Center for Epidemiologic Depression Scale)の日本語版	成人	①うつ気分、②身体症状、③対人関係、④ボジティブ感情	20	16点	小関・大谷・小関 (2014)；土屋・大谷・伊藤・小関 (2017)；坂(2015)；吉良・尾形・上手 (2018)
村田・堤・血田・中庭・小林 (現在は真志田ら (2009) の使用が認められている)	1989	CDI (Children's Depression Inventory) の日本語版	小中学生	—	27	22点	金子・本城・高村 (2003)
三浦・福田・坂野	1995	中学生用ストレス反応測定尺度	中学生	①不機嫌・怒り、②抑うつ・不安、③無気力、④身体的反応	24	なし	谷口・浦光 (2003)；谷口・田中(2008)
Goodman	2005	日本語版本人評定SDQ(Strength and Difficulties Questionnaire)	11~17歳	①情緒の問題、②行爲の問題、③多動/不注意、④仲間関係の問題、⑤向社会的な行動	25	なし	飯田・伊藤・青山・杉本・遠藤・フアエーロング(2019)
鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬楚・坂野	1997	SRS-18(Stress Response Scale-18)の日本語版	高校生 大学生 成人	①抑うつ・不安、②不機嫌・怒り、③無気力	18	なし	大谷(2007)
倉本・上林・中田・福井・向井・根岸	1999	ASEBA (Achenbach System of Empirically Based Assessment)の本人用YSR (Your Self Report)	11~18歳	①身体的訴え、②不安・抑うつ引きこもり、③思考の問題、④注意・社会性の問題、⑤非行的行動、⑥攻撃的行動	120	なし	廣瀬・濱口 (2021)

第3章 展望Ⅱ

1. 目的

展望Ⅱでは、小学生から高校生までの児童生徒を対象として、心理的不適応や問題行動を評価するうえで適用されている、教師による他者評定式尺度を概観することとした。抑うつとの関連が指摘されている、児童生徒の心理的不適応や問題行動について、早期発見や早期対応に役立てることを目指して、どのような内容を測定する教師評定用の尺度が用いられてきたか、その内容と抑うつとの関連、尺度の特徴について整理を行い、現状と今後の課題について検討することとした。

2. 方法

2000年から2021年の間に以下の7誌にて発表された、小学生、中学生、高校生を対象とした調査研究もしくは介入実践研究において、教師評定用の尺度を収集した。収集対象とした学術誌は、『心理学研究』『教育心理学研究』『カウンセリング研究』『認知行動療法研究(行動療法研究)』『ストレスマネジメント研究』『健康心理学研究』『パーソナリティ研究』であった。

なお、本研究で対象とした心理尺度は、因子分析により因子構造が明らかとなっていること、教師が評定者として使用することを目的として開発されたこと、という条件を満たすものとした。

3. 結果と考察

本研究の手続きにより収集された、教師による他者評価式尺度は、教師評定用社会的スキル尺度(渡邊・岡安・佐藤, 1998)、ソーシャルスキル尺度(河村, 2001)、児童用社会的スキル尺度教師評定版(磯部・佐藤・佐藤・岡安, 2006)、ADHD Rating Scale-IV(DuPaul, Power, Anastopoulos, & Reid, 1998)、日本版教師評定用SDQ(Goodman, 2005)、日本版SRS-2対人応答性尺度(Constantino & Gruber, 2013(神尾訳, 2017))、ASEBA(船曳・村井, 2017)、の7種類であった(Table2)。また、『カウンセリング研究』『ストレスマネジメント研究』『健康心理学研究』『パーソナリティ研究』においては、本研究の基準に合致する尺度は抽出されなかった。本邦で開発されている教師が評定者として使用することを目的としている尺度は少ないことが示唆された。

測定される内容ごとに大別すると、ソーシャルスキル(磯部ほか, 2006;河村, 2001;渡邊ほか, 1998)、ADHD傾向(DuPaul et al., 1998)、ASD傾向(Constantino et al., 2013(神尾訳, 2017))、心理社会的適応(野田ほか, 2013;船曳ほか, 2017)と考えられる。このように、教師による他者評価式尺度においては、教師から観察した行動面を測定する内容が中心であった。日本版教師評定用SDQ(Goodman, 2005)とASEBA(船曳ほか, 2017)に関しては、下位尺度名に”抑うつ”や”情緒”が含まれていたが、これらの下位

尺度では、抑うつ状態にみられやすい行動的特徴（たとえば、突然泣く、自殺についての話題を出すなど）を尋ねる項目内容によって構成されていた。

また、半数が小中学生を評定することを目的として開発された尺度であった。小中学生と高校生では、必要とされるスキルや、アルバイトや部活動などにより環境が大きく異なることから、高校生に適用する際の妥当性については、留意する必要があると考えられる。高校生の実態を考慮した、生徒の心理社会的側面を測定できる、教師による他者評価式尺度の開発が求められる。

以上のことから、児童生徒の心理的不適応や問題行動を教師が評価する、代表的な他者評価式の尺度では、半数が小中学生向けの尺度を適用していたこと、測定内容は生徒の行動面が中心的であったことが明らかとなった。特に、自覚しにくい発達特性に由来する行動面の特徴、ソーシャルスキル、抑うつを維持および悪化させる可能性の高い非機能的行動についての情報収集の際には、教師による他者評価式尺度が有用であると考えられる。また、主観的な困り感の少ない児童生徒における、心理的不適応や問題行動のリスクについて把握するうえでも重要である。

その一方で、生徒の主観的苦痛や認知面のアセスメントにおいては、教師による他者評価式では限界があると考えられる。症状や問題が顕在化する前の段階で心理的不適応や問題行動について把握するうえでは、生徒の自覚の程度や主観的体験についても情報を得る必要があると考えられる。また、今後の課題として、どの教員が評定者となるかの選定において、高校においては、小中学校よりも一般的に教科担任制の強い形態にある点を考慮する必要性も考えられる。本研究によって抽出された、教師による他者評価式尺度を用いていた先行研究においては、主に担任教員が評定者であった。高校においても、一般的には、対象生徒の様子を観察する機会が多く、日ごろの様子や変化をとらえやすい担任教員が妥当であると考えられる。しかしながら、対象の高校の実態や生徒の問題によっては、複数の場面での生徒の様子を捉えるために、部活動の顧問や各教科の教員、進路指導主事の教員など、複数の教員で評価する必要性も考えられる。

Table2 展望Ⅱによって収集された、教師による他者評価式尺度

著者名	発表年	尺度名	評価対象者の年齢	下位尺度	項目数	カットオフ値	引用論文
渡辺・岡安・佐藤	1998	教師評定用社会的スキルの尺度	小学生	①学業, ②協調性, ③主張性, ④社会的働きかけ, ⑤防衛行動, ⑥引っ込み思案行動, ⑦攻撃行動	49	なし	後藤・佐藤・佐藤(2000); 金山・後藤・佐藤(2000)
河村	2001	ソーシャリスキルの尺度	小中学生	①配慮のスキル, ②かわわりのスキル	28	なし	藤原・西村・福住・村上・河村(2021)
磯部・佐藤・岡安	2006	児童用社会的スキルの尺度教師評定版	小中学生	①働きかけ, ②学業, ③自己コントロール, ④仲間強化, ⑤規律性, ⑥外面化行動問題, ⑦内面化行動問題	37	なし	荒木・石川・佐藤(2007); 半田(2014); 岡島・谷・鈴木(2014); 吉田・井上(2008)
Dupaul, Power, Anastopoulos, & Reid (市川・田中監修)	2008	ADHD Rating Scale-IV	5~18歳	①不注意, ②多動性・衝動性	18	アセスメントの目的に応じて設定される	野田・岡田・谷・大西・望月・中島・辻井(2013)
Goodman	2005	日本版教師評定SDQ (Strength and Difficulties Questionnaire)	4~17歳	①情緒の問題, ②行為の問題, ③多動/不注意, ④仲間関係の問題, ⑤向社会的な行動	25	なし	岡島・中村・石川・東・大谷・作田(2021)
神尾	2017	日本版SRS-2対人応答性尺度 (Social Responsiveness Scale)	4~18歳	①社会的な気づき, ②社会的認知, ③社会的コミュニケーション, ④社会的動機づけ, ⑤興味の問題と回復行動	65	なし	岡島・中村・石川・東・大谷・作田(2021)
船曳・村井	2017	ASEBA (Achenbach System of Empirically Based Assessment) の教師用TRF (Teacher's Report Form)	6~18歳	①不安・抑うつ, ②引きこもり・抑うつ, ③身体愁訴, ④不注意, ⑤多動衝動性, ⑥規則違反的行動, ⑦社会性の問題, ⑧思考の問題, ⑨攻撃的行動, ⑩その他の問題	120	・症状群尺度 70点以上が臨床域 69から65の間がボーダーライン域 64以下は正常域 ・内向尺度・外交尺度・全問題尺度 64以上が臨床域 63から60の間がボーダーライン域 59以下は正常域	今田・小松・高橋(2006)

第4章 総合考察

本研究における展望Ⅰおよび展望Ⅱを踏まえ、高校生の抑うつに対する自己評定と教師評定のそれぞれの利点を生かした支援への活用や、今後の課題について、以下に展望を示す。

まず、測定される内容として、抑うつを測定するために用いられる自己評価式尺度においては、情緒面や感情面（たとえば、最近2週間の自分は落ち込んでいるか、突然悲しくなることがあるか、など）が中心的であった（展望Ⅰ）。その一方で、小学生から高校生までの児童生徒の心理的不適応や問題行動の測定に用いられる、教師による他者評価式尺度においては、教師から観察される生徒の行動面が中心的であった（展望Ⅱ）。これらを踏まえると、心理尺度を用いて生徒の状態像を情報収集する際には、自己評価式尺度では、生徒の主観的な体験である感情や、それに関連する認知を測定することが有用と考えられる。それに対して、教師による他者評価式尺度では、日常生活への支障度や、抑うつの維持および悪化に関連する行動面を測定することが有用と考えられる。実際に、坪井・李(2007)では、虐待を受けた子どもの行動と情緒の特徴について検討することを目的として、自己評価式尺度と児童養護施設の担当職員による他者評価式尺度を用いて調査を実施した。その結果、自己評価式尺度と他者評価式尺度のそれぞれに測定しやすい内容と測定しにくい内容があり、両者を組み合わせて実施することで、より多面的な理解ができると指摘している。たとえば、自己評価式尺度では、認知面や身体症状などの子どもの主観的に知覚される問題を捉えやすいのに対して、他者評価式尺度では子どもが気づきにくい社会的な問題行動や注意の問題を、客観的に捉えやすかったことを挙げている（坪井・李, 2007）。このような評定者による測定内容の違いや、長所と短所を踏まえたうえで、心理尺度を活用することが重要と考えられる。

このような視点を踏まえると、学校現場における具体的な活用方法としては、たとえば特別な配慮が必要と思われる生徒に対してアセスメントを行う際には、自己評価式尺度によって本人の主観的な心理的苦痛について数量的な評価を行い、教師による他者評価式尺度によって生徒の行動的特徴や日常生活の支障度を評価する、などといった活用方法が考えられる。教師の方が生徒本人よりも、生徒の行動的特徴や問題行動をより分化して把握することができると考えられるが、教師の前では問題行動を示さなかったり、教師の主観に左右されたりする可能性もあるため、自己評価式尺度と組み合わせて検討することが、より精度の高い情報を収集するうえで望ましいと考えられる。

また、このような活用方法は、介入効果の検証においても有用と考えられる。たとえば、失敗体験となる可能性が高い場面を避ける、などといった回避行動は、抑うつの維持もしくは悪化をもたらすことが指摘されており（Martell et al., 2010）、抑うつの予防においても重要なターゲットになると考えられる。集団ストレスマネジメントなどの心理的介入を学級単位で実施した前後に、自己評価式尺度によって、生徒の抑うつ水準が低下している

ことを示すだけでなく、教師による他者評価式尺度を用いて、生徒の回避行動が機能的に変容したことを確認できれば、一時的な介入効果のみではなく、中長期的な介入効果の維持が期待できると考えられる。

実証に基づく臨床心理学 (Evidence - Based Clinical Psychology) の観点からも、信頼性の高い抑うつの評価やアセスメントの重要性が高まっていると考えられる。高校生に適用可能であり、十分な信頼性と妥当性を有する尺度を用いて、知見の蓄積が行われることで、高校生の心理的支援の発展につながることを期待する。

引用文献

- Clayborne, Z. M., Varin, M., & Colman, I. (2019). Systematic Review and Meta-Analysis: Adolescent Depression and Long-Term Psychosocial Outcomes. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 58 (1), 72-79.
- Constantino, J. N. & Gruber, C. P. (2013). *Social Responsiveness Scale, Second Edition (SRS-2)* (神尾 陽子 (2017). SRS-2 対人応答性尺度 日本文化科学社)
- DuPaul G. J., Power, T. J., Anastopoulos, A., & Reid, R. (1998). *ADHD Rating Scale-IV: Checklists, norms, and clinical interpretation*. Guilford Press. (デュポール, G. J.・パワー, T. J.・アナストポウロス, A.・リード, R. 市川 宏伸・田中 康雄 (監修) (2008). 診断・対応のための ADHD 評価スケール ADHD-RS —チェックリスト, 標準値とその臨床的解釈— 明石書店)
- Goodman, R. (2005). Downloadable SDQs and related items. <https://sdqinfo.org/py/sdqinfo/b0.py> (September 25, 2021)
- 橋爪 誠 (2017). 高校生への対応—診療所心療内科医の立場から— 心身医学, 57 (11), 1127-1132.
- 船曳 康子・村井 俊哉 (2017). ASEBA 行動チェックリスト (TRF: 教師用) 標準値作成の試み 児童青年精神医学とその近接領域, 58 (1), 185-196.
- 福田 一彦・小林 重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, 75 (10), 673-679.
- 石川 信一 (2011). 児童青年の内化障害における心理査定 心理臨床科学, 1 (1), 65-81.
- 磯部 美良・佐藤 正二・佐藤 容子・岡安 孝弘 (2006). 児童用社会的スキル尺度教師評定版の作成 (資料) 行動療法研究, 32 (2), 105-115.
- Johnson, D., Dupuis, G., Piche, J., Clayborne, Z. & Colman, I. (2018). Adult mental health outcomes of adolescent depression: A systematic review. *Depression and Anxiety*, 35 (8), 700-716.
- 金山 元春・中台 佐喜子・磯部 美良・岡村 寿代・佐藤 正二・佐藤 容子 (2006). 幼児の問題行動の個人差を測定するための保育者評定尺度の開発 パーソナリティ研究, 14 (2), 235-237.
- 河村 茂雄 (2001). ソーシャル・スキルに問題がみられる児童・生徒の検討 岩手大学教育学部研究年報, 61 (1), 77-88.
- 小関 俊祐・大谷 哲弘・小関 真実・伊藤 大輔 (2014). 東日本大震災被災高校生に対する集団認知行動的介入が PTSD 症状と抑うつ症状に及ぼす効果 ストレスマネジメント研究, 10, 111-120.
- 倉本 英彦・上林 靖子・中田 洋二郎・福井 知美・向井 隆代・根岸 敬矩 (1999). Youth Self Report (YSR) 日本語版の標準化の試み: YSR 問題因子尺度を中心に 児童青年精神医学とその近接領域, 40 (4), 329-344.
- 真志田 直希・尾形 明子・大園 秀一・小関 俊祐・佐藤 寛・石川 信一…佐々木 和義 (2009). 小児抑うつ尺度 (Children's Depression Inventory) 日本語版作成の試み (資料) 行動療法研究, 35 (3),

- 219-232.
- Martell, C. R., Dimidjian, S., & Herman-Dunn, R. (2010). *Behavioral activation for depression: a clinician's guide*. New York: The Guilford Press.
- 三浦 正江 (2006). 中学校におけるストレスチェックリストの活用と効果の検討 教育心理学研究, 54 (1), 124-134.
- 三浦 正江・福田 美奈子・坂野 雄二 (1995). P4024 中学生の学校ストレスとストレス反応の継続的変化 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 555.
- 文部科学省 (2021). 令和2年 児童生徒の自殺者数に関する基礎資料集. https://www.mext.go.jp/content/20210216-mxt_jidou01-000012837_009.pdf (October 20, 2021)
- 村田 豊久・堤 龍喜・皿田 洋子・中庭 洋一・小林 隆児 (1989). 児童・思春期の抑うつ状態に関する臨床的研究—II CDIを用いての検討— 厚生省精神・神経疾患研究委託費研究報告書 児童・思春期精神障害の成因及び治療に関する研究 昭和63年度 (pp. 69-76)
- 中井 富貴子・宇野 宏幸 (2005). 教師用の子どもの行動チェックリスト作成に関する調査研究—注意欠陥多動性障害と広汎性発達障害に焦点をあてて— 特殊教育学研究, 43 (3), 183-192.
- 中島 俊思・伊藤 大幸・谷 伊織 (2012). 日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire の構成概念妥当性の検証: 1 郊外市の全数コホートデータを用いた検討 臨床精神医学, 41 (7), 917-924.
- 中澤 潤・中道 圭人 (2007). 子どもの行動尺度 (CBS) 日本版の作成 千葉大学教育学部研究紀要, 55, 97-105.
- 大島 陸・吉良 悠悟・神原 広平・重松 潤・松本 美涼…尾形 明子 (2019). 通信制高校生に対する抑うつ予防プログラムの効果の検討 日本心理学会第83回大会発表論文集, 394.
- 島 悟・鹿野 達男・北村 俊則・浅井 昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, 27 (6), 717-723.
- 杉山 崇 (2007). 抑うつの心理臨床に向けたロールシャッハ法, TAT, SCT と各種質問紙法の実施法および臨床的利点: 投影法, 質問紙法の臨床活用とテストバッテリーに向けた一考察 山梨英和大学紀要, 6, 19-39.
- 鈴木 伸一・嶋田 洋徳・三浦 正江・片柳 弘司・右馬埜 力也・坂野 雄二 (1997). 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, 4 (1), 22-29.
- 立元 真・戸ヶ崎 泰子 (2007). 幼保小連携のための子どもの行動傾向尺度の作成 宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学, 17, 108-118.
- 坪井 裕子・李明憲 (2007). 虐待を受けた子どもの自己評価と他者評価による行動と情緒の問題— Child Behavior Checklist (CBCL) と Youth Self Report (YSR) を用いた児童養護施設における調査の検討— 教育心理学会研究, 55, 335-346.
- 堤 亜美 (2013). 高校生に対する抑うつ予防心理教育プログラムの効果の検討 臨床心理学, 13 (5), 700-711.
- 土田 まつみ・三浦 正江 (2011). 小学校におけるストレス・チェックリストの予防的活用 カウンセリング研究, 44 (4), 323-335.
- 渡邊 朋子・岡安 孝弘・佐藤 正二 (1998). P-2 教師評定用社会的スキル尺度の標準化の試み 日本行動療法学会大会発表論文集 (24), 100-101.
- 山口 祐子・山口 日出彦・原井 宏明・渡邊 亜紀・田中 恭子・庄野 昌博・弟子丸 元紀 (2009). 高校生における抑うつ群・推定うつ病有病率の3年間の縦断的研究 臨床精神医学, 38 (2), 209-218.
- Zigmond, A. S. & Snaith, R. P. (1993). The Hospital Anxiety and Depression Scale (HAD 尺度) 精神科診断学, 4 (3), 371-372.